

日本語非母語話者の話し言葉に対する 母語話者評価の研究

野原 ゆかり

学位取得年月：平成 24 年 9 月

取得学位名：博士(人文科学)

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】母語話者評価、印象形成、評価環境、第三者、当事者

【要旨】

本研究は、日本語非母語話者の話し言葉に対する母語話者の評価の実態を明らかにし、日本語教育現場において非母語話者の話す能力について何をどう評価すべきなのか、評価のあり方を提言することを目的としている。近年、教育現場の評価基準の見直しやシラバスの再構築を目的として、一般の日本人の評価の視点を取り入れた母語話者評価の研究が多く行われてきた。しかし、それらの研究は一般の日本人を評価者としているにもかかわらず、実際の言語運用の場で行われる評価活動に関心が向けられていない。つまり、何を対象にどのような立場で評価に関わるかといった評価が行われる「環境」や、評価項目に反映されることのない「印象」については、度外視されてきたと言える。本研究では、評価環境や発話から受ける印象が人の評価活動に関わる重要な要素であると考え、それらを分析視点として、一般の日本人の評価について量的な分析から質的な分析へと掘り下げて考察した。モノローグの音声を用いた研究Ⅰ、Ⅱ(第4章)、ロールプレイ動画を用いた研究Ⅲ、Ⅳ(第5章)、さらにロールプレイの参加者を対象にした研究Ⅴ(第6章)の5つの研究で構成されている。研究ⅠからⅣを第三者環境における評価、研究Ⅴを当事者環境における評価として、それぞれの環境での母語話者の評価活動の実態を探った。

まず研究Ⅰでは、母語話者を一般日本人グループと日本語教師グループに分け、ストーリー・テリングの発話の分かりやすさを判断する要因を定量的に分析した。その結果、一般日本人は「内容」、「音声」、一方日本語教師は「意味的つながり」、「言語使用の適切さ」、「音韻的つながり」と異なる基準を用いていることが分かった。研究Ⅱでは、判断にいたるまでの評価の視点の方向と動きを掘り下げて検討するため、判断理由のコメントを質的に分析した。その結果、言語形式に向けられた「ミクロの視点」、談話のまとまりや文脈に向けられた「マクロの視点」、マクロからミクロへと焦点を変化させる動的な「ミクロ・マクロの視点」の存在が窺え、これらは「発話そのものに対する評価の視点」であると考えられた。また、この視点の影響を受け、さらに、発話から受ける印象によりイメージされた学習者の態度や、想定された場面での能力にまで向けられる視点の存在が窺え、これを「人物に対する評価の視点」とであると解釈した。

研究ⅢとⅣでは、接触場面の交渉のロールプレイ動画を対象に、「印象の良さ」を評定の指標として、母語話者の傾向からその集団でのグルーピングへと考察を深めた。研究Ⅲでは、「交渉の進め方」、「親しみやすさ」、「適切さ」、「パラ言語・非言語による伝達」の4つの因子が抽出され、印象の良さに影響を与えていることが分かった。さらに、これらの4つの要因と日本語の上手さの関係に注目して分析した結果、「交渉の進め方」と「適切さ」が日本語の上手さの予測に有意に寄与していることが分かった。また、研究Ⅳでは、研究Ⅲの因子分析の結果をもとに、それぞれの要因が印象形成に影響を与える度合いを分析の観点として、評価者(母語話者)50名のグルーピングを試みた結果、4つのグループに分けることができた。

研究Ⅴでは、ロールプレイ後の振り返りインタビューを分析した。その結果、母語話者は自分自身も言語運用を意識し、調整をしようとしていることが窺えた。このことから、相手に対する印象形成のプロセスの中に、自分自身の言語意識、言語運用が組み込まれていることが考えられた。

最終章(第7章)において、これら5つの研究の結果を(1)評価環境と印象形成の関係、(2)同じ評価環境での評価傾向の違い、の2つの観点から総合的考察を行い、現場に応用できる印象を含めた評価の可能性と教師教育としての評価トレーニングについて論じた。

(のはら ゆかり)